

**Q1.認知症カフェを継続させていく上で、難しさや課題はどんなところにありますか。**

**A1.**カフェ継続を難しくするものには外的要因と内的要因がありますが、決定的なのは後者だと思えます。特に運営グループのなかでカフェの自己イメージが共有されていなければ、いずれ方向性に迷いが生じ継続は困難になるでしょう。一方、自分たちのできること、やりたいこと、求められていることがしっかりと認識されていれば、多少の環境変化には対応できるはずですが、まずは自分たちの主体が何であるかを客観的に見つめ直すことをお勧めします。家族なのか、本人なのか、専門職なのか、あるいは学生なのか。それぞれ期待されることが異なります。その期待に正面から向き合うか、少し角度を変えて向き合うかは選択次第であり、まさにカフェの個性が出る部分となります。

**Q2.認知症カフェをさらに活性化させ、地域に広げていくポイントは？**

**A2.**今後、認知症カフェを活性化させ、地域に広げていくためには、認知症カフェのイメージを変えていく必要があります。残念ながら社会にはまだ認知症への誤解やスティグマがあり、多くの人は認知症の人はどこか専用の居場所にいるべきだと「ごく自然に」感じています。そうした人々は「認知症カフェ」という単語を知り、認知症の人の居場所だと理解しています。そんな世間の誤解に対して、わたしたちは何度でも「違う」と言い続けてなければなりません。認知症カフェは認知症の人だけが集まる場所ではなく、あらゆる人が立場を越えて「認知症」について語り合う場です。そこに当事者エキスパートとして認知症の本人や家族が参加するのは当たり前なのだという理解を広めていきたいところです。

**Q3.制度の隙間をフォローする小さな認知症カフェが、好評で終了せず継続している認知症カフェの件数は多いですか？**

**A3.**「小さなカフェ」は調査や統計に表れにくく、取材者としての体感でしかお答えできませんが、中心となる人物がカフェを必要としなくなっても継続する事例は多くはないでしょう。わたくしがこれまで見聞した「小さなカフェ」は、自宅に友人を招くカフェや、若年性認知症当事者と定期的に飲みに行く同級生の集まりなど、プライベートな性格が強いものがほとんどです。こうした取り組みはこれまで人知れず始まり人知れず終わってきたのだと想像します。「石蔵カフェ」や「ナミ・ニケーション」のように、賛同者を増やし大きくなった例はごく少数といえます。ただし今後カフェの立ち上げ方のひとつとして「小さなカフェ」から始めるというアプローチが知られるようになれば、もしかしたら継続するカフェが増えてくるかもしれません。わたくしとしては「小さなカフェ」が始まったり終わったりしながら、中には大きくなって継続するカフェもありつつ、一定数のカフェが常に地域で活動しているという姿を一つの理想として考えています。